

学童期柔道選手に生じた肘の内側障害の1例

筆頭演者 柴田 和幸¹⁾ 市立秋田総合病院 リハビリテーション科

共同演者 新出 卓斗¹⁾・並木 雄介¹⁾・赤川 学²⁾・菅原 慶勇¹⁾

1) 市立秋田総合病院

2) 秋田大学大学院整形外科学講座

Key words/ 肘内側障害, 柔道, スポーツ障害

【はじめに】

いわゆる野球肘とよばれる肘関節内側側副靭帯損傷や離断性骨軟骨炎などは小学生時期の投球障害としてよく知られる。今回柔道を行っている小学生でも同様のスポーツ外傷が発生し、理学療法介入した症例について報告する。

【方法】

10歳、女性、柔道歴は4年、身長138cm、体重30kgで練習中に背負い投げを行い受傷し、肘関節内側側副靭帯損傷の診断となった。受傷後1ヶ月の安静と早期から痛みの出ない範囲での可動域運動を開始し、フォーム指導を行い2ヶ月で復帰となった。

【倫理的配慮】

本報告はヘルシンキ宣言に則り、対象のプライバシーおよび個人情報の秘密保持に関して対象者および家族への説明と同意を得ている。

【結果】

本症例はつり手側の損傷であり、受傷起点が背負い投げであった。背負い投げのつり手は投球動作の arm cocking～acceleration 相に似ている型をとり、肩外転外旋位で行われる。身体機能や体格が未熟な学童期における誤ったフォームでの背負い投げが肘関節への負担を増大させたと推測された。

【考察】

本症例のフォーム分析から、背負い投げの際つり手の前腕回外と手の掌屈が不十分なため肘への外反ストレスが増大したと思われた。柔道選手の肘のスポーツ障害の発生は多いとの報告があるが、学童期における報告は少なく、若年層を対象とした検診や動作分析など今後の検討が必要であると考えられる。